

宮澤賢治の法華信仰を問う

— 宗祖のご信仰に照らしての私見 —

杉 岡 妙 恂

一、はじめに

昭和八年（一九三三）九月二日宮澤賢治は満三七年と二五日の一生を閉じている。

感動的な初随喜の体験を以て法華經に出会ったのは大正三年（一九一四）九月、満一八才になった頃だったので法華經と関わって生きたのは彼の後半生の一九年間ということになる。

法華經に出会って六年目の大正九年（一九二〇）の晩秋、彼は国柱会の信行部に入会している。

死の前日

いたづま
病のゆえにもくちんのちなり

みのりに棄てばうれしからまし

との辞世を残した彼の葬儀は宮澤家の菩提寺浄土真宗安浄寺で挙行されたが、今に伝えられている法名の『真金院三不日賢善男子』は国柱会から授与されたものである。

国柱会三代目会長田中香浦師は賢治について、

熱烈な研鑽（田中智学者『日蓮主義教學大観』を五回熟読したこと）のすえ、日蓮主義者としての自覚を深めていた賢治は大正九年二四歳のとき、国柱会の信行員に加盟、ご本尊も授与され、じらい「末法の大導師」であり「絶対真理」の法体である日蓮聖人に帰依し、「正しい日蓮門下」になりえた法悦を五体を感じ「本當の日蓮主義者」の指導者としての「田中（智学）先生に絶対服従」するといふ心境にたつた。

（……は筆者）

この日以来命終するまでの十三年間、賢治は信仰者として、その生涯を通じてついに退転することはなかったのである。

（『宮澤賢治の宗教世界』中の「賢治の信仰と国柱会」六二三、六二四頁）

と述べている。

この言葉は賢治が国柱会員となった直後に親友保阪嘉内に出した二通の書簡中に賢治自身が使っていた言葉で、當時法華信仰に対して抱いていた高揚した気持ちがよく表われている。それは書(177)と書(178)との二通。

賢治については熱心な法華経の信奉者であったとして、広く世間に知られている。それ故、一般の愛読者は先述した田中香浦師の賢治評に何の疑念も持たないに違いない。勿論、賢治の作品を愛し、優れた童話等を読むことによって自らの心情を清めたり、高めたり又は至福の時を持つことは幸せなよいことであって、そのことに於ては法華経信仰について兔や角詮索する必要は全くないと思っっている。然し彼の『法華経信仰』を取り上げて考えるところ立ち場に立つ時、当然事情は異ってくるだろう。書(177)・(178)等賢治の折伏の手紙と、よく知られているみごとな臨終正念の有様とを思い合わせて香浦師の見解を素直に認めるには賢治の日常生活（その所業や思想を含めて）には謎や矛盾が多すぎるのである。どうしても生涯を通じた日常生活の中に日々の確かな信仰実践が見えてこないののである。

親友嘉内にくり返し法華経を語り、強く帰正を願っていたのは、大正七年（一九一八）二月から大正一〇年（一九二二）七月までの四年間の期間だった。而も、父と親友嘉内への折伏は何れも不成就に終っている。更にたつ

た一人のかけがえのないその親友嘉内とは以後、遂に二度と見え^まることのない悲愴な訣別をしているのだ。濃密な交友から一挙に悲惨な訣別へと推移した不思議の中に隠されている真実は何だろう。

嘉内への手紙の中に賢治はその時々^まの思いのたけを赤裸々に語り尽している。そこには世間（父母や家族等にも）に向けては絶対見せなかった彼の内面が生まましく露出し予想もなかった側面がさらけだされていたりもする。人間賢治の怒りや悲しみ、思想のもろさや意志の弱さも頭にされて、一通の手紙の中でさえ、その内容がくるくる変わり、心の動揺が手にとるように感じられるものさえある。

賢治に対して筆者が抱いた最初の不審感は死に至る重病のトシへの意外なかかわり方であった。

かつては、誠実そのものであった賢治の信じ難い変心。賢治は例の如く『万物最大幸福の根源・妙法蓮華経云々』と熱く語り、トシに法華信仰を勧めたであろう。兄に導かれ同信となった大切な妹。而も重病の床に臥すいたわしい妹への不実を見過ごすことはできなかった。その理由を年譜にたずね『宮澤賢治友への手紙』を経て、私ははじめて嘉内その人に会った。彼は賢治の手紙からは想像できなかった、そして、賢治の異常な迄の執着が忽ち^{たちま}納得できる程人間性豊かな一口では表現し得ないが魅力溢れる人であった。『こんなにはすばらしい交友を何故賢治はひた隠し続けたのか？』ここに至ってどうしても解けなかった謎がやっと解け出てきた。今は見えてくる実態を正しく拾い上げられる様にと願っている。

文末に、三人がかかわって生きた大正五年から一年まで七年間の三人それぞれの事績と関連事項及び賢治の『書簡グラフ』を一覧表にまとめた。この小論では、とても文章化できない、錯綜して複雑な賢治の内面や、賢治と嘉内のそして賢治とトシとの関係をいろいろな角度から読みとっていただけたらと願っている。

尚、書簡グラフ中の書簡には、全て『校本 宮沢賢治全集』（以下『校全』と略す）第三巻に収録されているも

宮澤賢治の法華信仰を問う

のと同じ番号を付記した。又、本文中に引用した書簡には大正九年二月二日付書簡(177)の場合、書(177)(T9、12、2)のように表記した。

二、宮澤賢治法華信仰の概観

(1) 信仰に輝いた臨終とその周辺

昭和八年の九月二一日、午前一一時三〇分、賢治の病室から高々と響いてきた、彼の唱える御題目『南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經……』の声に驚いて集って来た家族を前に彼は次の様な遺言を父に托した。

「国訳妙法蓮華經を一千部おつくり下さい。お経の後ろに『私の一生の仕事はこのお経をあなたのお手元に届け、そしてあなたが仏様の心に触れて一番よい正しい道に入られますように』ということを書いておいて下さい。」と、末期の水は自ら母に所望し、うれしそうにコクコクと飲んで「ああいい気持ちだ」とくり返し、更に自らオキシフルをつけた消毒綿で体を清め、唱題をはじめてから二時間後の午後一時三〇分、安らかに靈山浄土へと居を移したのである。この尊厳にしてみごとな臨終正念のすがたは、正に法華經信奉者にふさわしい感銘深いものであったと云えよう。

二日後の葬儀式で彼の靈魂に捧げられた友人の弔辞には

(『校全』一四卷一一一七八―七九頁)

諸々の美と真と善のみを愛し一切己を捨ててあなたは從客と善逝スガシから来て善逝へとかへられた。(中略) あなたは私どもの人生にとって太陽であり、あなたの広い大きい愛の力、そして無数の作品は私どもの生活の日夜を照ら

して下さいました。(中畧)この町の人々は、この国の人々は、そして日本の人々は五〇年或は百年の後にあなたがどのやうに偉かったかといふことがわかるでせう。(後畧)

とのことばが残されている。

今年は賢治没後丁度六七年。今や賢治は日本ばかりでなく、世界の多くの国の人々に知られ、読まれ、愛されている。心が洗われるようにすばらしい童話や沢山の詩が世界中の多くの人々、童話に関心をもつおとなにも子どもにも愛読されているということは、私達の心をほのぼのと温かくしてくれてうれしい。このことは、賢治の作品(芸術)が国境を越え民族を越えず遍く人々の心に響く不滅の輝きを放っていることを物語っているといつてよいだろう。

周知の通り、賢治は盛岡高等農林学校で農芸化学を学んだ新進の科学者であった。その高度な知識に加えて、文学的にも豊かな才能に恵まれていた。殊に非常に特異な感覚や鋭い直感力を自在に駆使して多くの童話や詩をのこした優れた芸術家であった。彼は又、青年時代(一八歳の時)はじめて出会った法華経から大きな感動を受けて以来心はかなり激しい紆余曲折を経ながらも死に至るまで心を法華経につないできた。特に賢治は性来の宗教的感性と鋭い直感力によって、その経の理念や思想よりも、ずばり法華経世界を見事に感得していった人であったように思う。彼の作品に見られる生きとし生けるあらゆるものへ、等しく懸ける思いのやさしさや深さ、作品の中に見られる賢治と他者(他物)との一体感の妙に読者は魅せられ、かつて経験したことのない新たな世界に引き入れられていくように思える。

彼が三〇才でおこした『羅須地人協会』設立の理念として提起した『農民芸術概論』の綱要において「強く正しく生活せよ。苦難を避けず直進せよ」とよびかけ、「なべての悩みをたきぎと燃やし、なべての心を心とせよ。風とゆききし雲からエネルギーをとれ」と高らかに叫んだ賢治は「われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と

熱である……」と結んでいる。このように彼が銀河系を意識した四次感覚で捉えた宇宙認識。四次元世界は法華經の説く『法界』に通ずるものと考えられる。

『法界成佛』を説く法華經は人及び生物のみならず、山にも川にも石にも風にも一滴の水にも久遠実成の御本佛釈迦牟尼世尊の尊い御いのちが宿っていると説く。ものみな互に拝み合い、輝き合う大らかな世界。そんな法華經世界を賢治は直観していたように思える。

今や人類の存亡にかかわる環境問題。特に、様々な科学物質による環境の汚染や破壊は、国や地方単位で解決できるものではなく、地球規模で考えることが必至となっている現代、賢治に関しても新たに彼のエコロジカルな発想が注目されるようになってきている。この問題は最早科学の力のみでは解決不可能であると云う認識を明しているもので、論が飛躍するようであるが、今こそ法華經の理念が広く世に現われなければならない時が来たことを示唆していないだろうか。

一九九四年、当宗教学研究所発行の『環境問題を考える』冊子の表紙のことは

お題目を唱えること。それは

すべての生命いのちに呼びかけて

すべての生命を慈しみ、

すべての生命とともに生く。

これこそ日蓮聖人が私たちに

教え託されたばさつ行なのです。

と教示されていたことを思い起す。そして、

天下万民諸乘一佛乗と成りて妙法独り繁昌せん時万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壤つちぐんをくだかず代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理ことわり顕れん時を各々御覽ぜよ。現世安穩の証文疑いあるべからざるものなり。

(『如説修行抄』「定遺」七三三頁)

と、日蓮大聖人は、仏国土の実現という法華經の理想を示し、末法惡世に生きる我等凡夫の行ずべき道をお教え下さっている。

人生の規範を法華經に求めた宮沢賢治も『他者の幸福のために生きること』を願ひ、そのためならば『いかなる自己犠牲をも厭わない』と、自らの信条たる『まこと』を表明している。作品の中に表された『まこと』や、顕著な彼の事績が物語る『まこと』は無私なる行為が多い。それらは純粹な利他行・菩薩行であると称えられている。そして、そのような行為を支えていたものが彼の真摯な法華信仰であったと多くの人々に信じられている。そこに、「彼の一生は法華經に捧げられた一生であった。おびただしい詩も、すばらしい童話も、肥料設計も、農学校での授業もすべて賢治の体を通してあらわれた法華經であった。」

(『法華經の風先』第一卷四二八頁・紀野一義)

という、まことに一面の賢治にふさわしい讃辞が生まれている。それは賢治作品の多くの愛読者が変わらぬ憧憬を抱いて仰ぎみる信仰に輝く賢治の世界であったといつてよいだろう。

(2) 信仰を揺るがした特異な宗教観

「アメリモマケズ」は宮沢賢治の代名詞のように有名な詩である。

この詩についても色々な議論があったときが、私は挫折や病をくり返しながら尚も「まこと」を希求し、一途なのりのこめられたこの詩に強く心惹かれる。そして賢治のイメージには、この詩のことばのように謙虚で穏やかな印象が漂っている。しかし、実際は非常に強烈な個性と特異な感覚の持ち主であったため彼の内面は複雑で多くの矛盾を抱えていた。あまりにも才能や感性が豊かであり過ぎたせいかも知れない。兎に角、彼の研究者は多く、これが同じ一人に対する見解かと疑いたくなる程様々な評論が生まれている。それらの中から彼の一生を通し、客観的に検討された二人の方の見解を次に記してみたい。

先ず境忠一氏は『評伝 宮沢賢治』（二二、二三頁）において、

賢治が『漢和対照妙法蓮華経』を読んで感動し、入信の契機をつくったのは盛岡中学を卒業して進学をあきらめていた失意の時代である。国柱会に入会してファナティックな信仰にはいつていつた時代は盛岡高農を卒業して家業に従事し、将来の希望を失っていた時代である。晩年の信仰も農村活動の過労によって倒れた病床時代にあたりている。賢治の信仰は家の問題とからみあい、賢治の弱さや絶望とつながっている。（中略）彼は自分をめぐる環境の変化に異常な程敏感に反応した感覚型の人間であって、環境の必然はいつでも賢治を素通りしなかったのである。と記している。

今一つは西田良子氏の所感で、

賢治は常に激しく燃え、一途にまことを求め続けた人であった。そのため、彼の一生は燃焼し、挫折し、苦悶し、

模索することの連続であつたような気がする。(・印筆者)

(日本児童文学1989年11月特集 宮沢賢治の現在(1)一五頁下段)

とある。

先ず前者から云えることは、彼の信仰は、自分自身の或は周りの事情や環境によって絶えずゆれ動き、信仰姿勢が一貫していなかったことを指摘している。それも自分の願望が叶わず窮地に陥った時、唐突に信仰に逃げ込んで激しく燃えるという形をとつたように思える。その急激な変転に直面すると、彼には念願を成就するための忍耐強い努力の足りなさを感じ、強く語る信仰も、観念とことばは燃え立っているがそれを支える肝心の実践(地道な信仰)は感じとれないのである。

激しく燃えたけれども遂に挫折すると言う現象は現実によくあることかも知れない。然し西田氏のことばから私は燃焼と挫折と云う二つの事象が賢治に於ては常に連続して繰り返されたという特殊な状況がはしなくも強調されているように思える。而もそれが一筋にまことを求め続けたがための結果であつたとされているのである。とすれば賢治が求めた「まこと」は今まで一般に考えられて来たように、又、賢治自らがかつて表明したように、法華経への帰依と、固い信仰のもとに生み出され、その信仰実践によってこそ達成されると考えられた「まこと」とは内容において変質していったとみななければならないのではないだろうか。つまり法華経への固い信仰を根幹にして貫くべきであつたまことから肝心の法華信仰が脱落してしまつたと云うことになってしまつていないだろうか。賢治が掲げたまことの言わば魂であつた法華信仰が若しくなつたとすれば、そのまことはぬけがらにも等しいものとなり、いくら燃焼しても成就しないのは当然と云えよう。

(~~~~~は筆者)

いずれにしても賢治の宗教観がどんなものであつたかもう少し具体的に知る必要があるだろう。

宗教と学問や芸術とは精神的所産であることに於ては同じであつても、学問が追求する真理と、芸術が追求する美とは共に人間にとって客観的对象、つまり外的存在であるのに対して、宗教は学問や芸術と同列ではなく、その次元を異にするものであると私には思える。

まず一般概念としての宗教をどう認識すればよいか。幾冊かの辞典に目を通した。その中で『改訂 新潮国語辞典』（久松潜一博士監修）には、

宗教の求めるものは「超自然的・超人間的なもの、その極みたる至上無限の超越的絶対者（これらはそれぞれ神その他の名で呼ばれる）への信仰・帰依を軸とする云々。」と定義されている。

至上無限の超越的絶対者に当るものは当宗でいえば『十界勧請の大曼荼羅御本尊』であり、『総名南無妙法蓮華経』であるといえよう。それは信仰以外によつては求め得られない、確かめ得られないものではないだろうか。信仰とは絶対者たる御本尊への帰依のもと、先ず心を内なる自己に向けた内省から始め、懺悔や誓願へと思いを深め信仰者としての自己の確立を目ざしつつ、御本尊の世界を目ざして菩薩行の実践に励むことである。その営みは内的、どこまでも個々人が主体となつて歩まねばならない道である。その道は尊く憧憬する道ではあるが、厳しくて末代幼稚、極悪の劣機たる我等凡夫には行きかねる道でもある。

（・印筆者）
そんな全てを悉く見そなわされた宗祖日蓮大聖人は法華経信仰について

「末代の修行は一向に唱題によるべきである。」（『四信五品抄』）「定遺」二二九四〜二三〇〇頁）
ということを詳しく、お教え下さっている。だから唯もう仰せの如く、声を惜しまず、

「本門八品 上伝所伝 本因下種の南無妙法蓮華経 南無妙法蓮華経……」

と唱え続ければよいのである。それが「一切衆生は本来から皆ぼさつ（成仏可能者・仏の子）である」と説かれてい
る法華經の信者の行ずべきぼさつ行なのである。その行は、いかに煩わしいことがあっても唱え続けることが肝心な
のである。それ故、ある時は燃えるが、まわりの事情によって変転をくり返した賢治の信仰は望ましい姿ではなかつたといわねばならない。

宗祖大聖人のおことば（『上野殿御返事』「定遺」一四五一頁）のように「水の如くいつも退せず」信じていかねば
ならないのである。いかなる時も流れ続ける水のように唱え唱え唱え続ける御題目の経力によつて、やがて極悪の劣
機たる凡夫の身にも信は決定し、唱え続ける唱題は折伏下種の菩薩行・（自利々他共、同時に円満成就するぼさつ行）
となつて自らは知らず計らず、

「皆行菩薩道 当得作佛」皆菩薩の道を行じて、当に佛と作ることを得る」（常不輕菩薩品）のである。成佛に至
る唯一の道、それは法華經信仰であり、唱題下種の菩薩行なのである。而も、その修行はそれぞれの生活の中で誰も
が出来る信仰であり、誰もができる修行である。地位や仕事や貧富の差などに関係なく、誰もが等しく歩める道なの
である。

然し、その道に、善意にみち、まことを求め続けた賢治がつまずかねばならなかったのは何故だろう。

今少し彼の作品等にもみられる宗教観の特異性について考えてみたい。彼は『銀河鉄道の夜』（初期形）に於て、

「われわれは実験によつて、水は酸素と水素とから出来ているということを誰もが知っている。その様に心の善悪
についても勉強して実験でちゃんと本当の考えと嘘の考えとを分けてしまえば実験の方法さえ決ればもう信仰も科
学と同じやうになる云々。」

とブルカニロ博士に語らせている。（・印筆者）（『校全』九卷一四一・二頁 要約）つまり、科学と同じように宗

宮澤賢治の法華信仰を問う

教も実験によつて証明されるようになると考えていた賢治は

〈あかるいひるま〉(『校全』第四卷二八二頁)に

聖者たちから直観され(以下不明)

古い十界の図式まで (『十界曼荼羅御本尊をさしているのだろう。』)

科学がいまだに行きつかず

はつきり否定もできないうちに

たうたうおれも死ぬのかな(以下畧)

いま死ねば

いやしい鬼にうまれるだけだ

と書き、自分の死には間にあわないが、今に科学がわれわれの信仰に届いてくるのだと云う思いは抱き続けている。

又森佐一宛書(200)(T14、2、9)に

「私はあの無謀な『春と修羅』に於て序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し云々と驚くべき考えを述べている。

最後、死に至る病中に於てさえ、尚

難信難解、科学ヲ習ヘル青年ノ

詳

嘉章大師讃

祥

法華經入門ニ際シ高等数学ニヨル解釈ノ可否

(『校全』一二卷上) 雨ニモマケズ手帳六九頁)

() 内は筆者

と記している。宗教と科学の統一（？）を目論む（と云うか期する）科学者賢治の高等数学への傾斜振りがありありと目に映る。賢治が手帳の一面に秀才の誉高い嘉祥大師を中央に讃じて提示したこのメモは科学を勉強している学生が法華經に入信しようと思う時、彼等が習っている高等数学の方式で以って解釈すれば難信難解の法華經の意味が或は簡単に解けるのではないだろうか。と問うている。

この問いにどう答えるか。本門寿命品と共に法華經の二大中心をなす方便品の教義にたずねてみたい。

その冒頭に「諸仏智慧 甚深無量 其智慧門 難解難入：所不能知（知る能わざる所なり）」とある。末法下機下根の我等凡夫、いかに高等数学を学ぶ知識豊かな秀才といえども当然、知る能わざる所であり「賢治のおもいは論外である」といわねばならない。

更に經典を見ていくと、

「この法は、思量・分別の能く解する所に非ずして、唯、諸の仏のみありて、乃ち能くこれを知りたまえばなり。所以はいかん。諸の仏・世尊は、唯、一大事の因縁をもつての故にのみ世に出現したまえばなり。」

（『岩波法華經』上八八頁）

「諸の仏・世尊は、衆生に仏の知見を示さんと欲するが故に、衆生をして、仏の知見を悟らしめんと欲するが故に、衆生をして仏の知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗よ、これを諸仏は、唯、一大事の因縁をもつての故にのみ、世に出現したもうとなすなり。」

又「諸の仏・如来は、但、菩薩のみを教化したもう。すべての所作は、常に一事のためなり。唯、仏の知見をもつて、衆生に示し悟らしめんためなり。」「如来はただ一仏乗をもつての故にのみ、衆生のために法を説きたもう。」
等々、世尊は智慧第一の舍利弗に語っておられる。

このことについて苅谷先生は、その著『法華経一仏乗の思想』で

諸仏出現の唯一目的たる「ぼさつを教化すること」とは、まずその根底に「一切衆生は皆悉く本来よりぼさつである。」「一切衆生皆悉ぼさつ」という前提があつて、その前提の上に立って、その「ぼさつたる一切衆生をぼさつとして教化すること」という意味に理解されるべきものとなるのである。

この「ぼさつ教化」という立場は一切衆生を全てそこに包摂し尽くしている故に、世間にはただそれだけしか存在しない。故に、「この乗ただ一つ」即ち「一乗」であるといわれているのであり、又、それは一切衆生を全て「ぼさつ即ち成仏可能者」とし、その上に立って、そのぼさつを教化するという立場であるから、一切衆生が仏になる立場であり、まさしくその意味で「一仏乗」と名づけられているのであり、二云々

このように「一仏乗」であり、かつ「一乗」であるといわれていること即ち「一仏乗」であることの理由が当著書に於て明確に実に詳しく述べられている。続いて、

それでは、いかなる根拠にもとづいて「一切衆生皆悉く本来よりぼさつ（成仏可能者）である」と法華者団は主張するのか、という問がここで必然的に生じるであろう。ところが、それに対する答は『法華経』のどこにも見出されないのである。これはどういうことであろうか。思うに、『法華経』においてはそれはまさに仏智、正覚内容そのものとされているからではないだろうか。もしそのように「一切衆生皆悉ぼさつ」をもって仏智だとするならば、ここで何故にと問うこと自体が間違っていることになる。なぜなら仏智は難解であり、そもそもが不可言説なのであって、我々凡夫の論理的思惟の及ぶところではないと、「方便品」の冒頭から既にくり返し宣言されているからである。実に「一切衆生皆悉ぼさつ」は仏智なのであり、まさに、「如来の智慧の直観」仏知見に他ならないと考えられるのである。等、説明されている。

（『法華経一仏乗の思想』一〇七、一〇八頁）

今生こんじょうの生せいを現代（昭和・平成の世）に受け、唯仏与仏の世界に属する「仏知」ぶつち一切衆生皆悉しつぼさつ・成仏可能者」の御教ごきょうに出会えたのである。そのことを末法の下機下根愚かな凡夫そのままで一人残らず「信じなさい」と仰せになっている。おそろしい程のこの御ことばを私も信じさせていただけるといふことは、これはもう唯ごとではないことなのだ。「佛ほとけ」とは「人に弗あらず」という意味をあらわしていると言いたことがある。悲しいことだけれど、それなら素直に頷ける。自分（人間）をよく省みて、よく弁わえた人智の確かな人の叡知から生まれた文字であろう。ところが何もかもお見通しの佛様が法華經においてはじめて「一切衆生皆悉しつぼさつ」ぶつち「仏智」をお示し下さったのである。とすればこのことは末法法華信仰の原点であろう。そして荻谷先生が、『法華經』の明かす成仏のための実践行。ぼさつ行は『法華經』の唱導を措いて他にないのである。

（興隆学林紀要 九号一六頁）

とおっしゃる、そのぼさつ行こそが、聞法下種の唱題行に他ならないのである。

終生まことを求めて利他行に身を捧げた賢治であったが、彼の行為は法華經の説くぼさつ行とは云えなかつた。

何故なら、彼の信仰は嘉内との悲惨な訣別によって噴き出した法華信仰への疑念と、堪え難い悔恨の情との二つの秘事と向き合う中で、遂に自らを修羅と標榜した新しい道を歩み出し、次第に法華信仰の原点から乖離かいりしていったからである。（但し、重なる業病に導かれて法華經への思いは再び深まり、最後は法華信仰によって臨終正念を遂げるこゝとができた。そのことは賢治にとって何よりの幸せであったにちがいない。）

宗祖大聖人は「今、末法に入りぬれば余経も法華經もせん（詮）なし、但南無妙法蓮華經なるべし。……此南無妙法蓮華經に余事をまじ（交）へば、ゆゆしきひ（僻）が事也。」

（『上野殿御返事』一四九二）

とまで仰せである。そして又、

佛になる道は善知識にはすぎず、わが智慧なにかせん。ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知

識たいせちなり。而レに善知識に値フ事が第一のかたき事なり。

〔『三三歳祈雨事』「定遺」一〇六五頁〕

と、善知識（正法を説き教化する人）について学び修行することの大切さを述べられている。『絶対服従する』とまていった田中智学師にさえ唯一度の面談もしなかった賢治は、何故か、善知識を求めようとしなかった人であった様な気がする。

三、妹・トシの信仰心

賢治と二才違いの妹トシは宮澤家の長女として淑徳模範の生活を送ったといわれている通り、意志の強い而も誠に心のやさしい聡明な女性であったと思われる。そんなトシは、父母や家族を困惑させ心配をかけた続けた賢治とは対照的な存在であった。溢れる程資料の多い兄に比ベトシのそれは皆無と云ってよい程残されておらず、賢治の作品を通してはじめて表面に出ることになった妹でありながら賢治の固く秘して見せなかった内心を色々な面で映し出す鏡のような役割を果たした彼女に筆者は賢治と云う大木を支えた強靱な根のような確かな存在感を覚える。

トシは生前の大正六年六月二三日病床に在った祖父に宛て生死について述べた長い手紙を残している。そこには生と死にかかわる人間の有り様に対する深い思索から出たことばがしみじみと語られている。これが一九才の乙女の言葉であろうかと感服させられるもので、賢治が友への書簡で語った文とはその趣がやはり対照的である様な気がしてならない。

その手紙（『宮澤賢治「妹トシへの詩」鑑賞』（一一九―一二三頁）暮尾淳著）に

「私も大切な死後の事一刻も早く心にきめる様にと思ひ居り候へど未だ確かな信心もなく云々」

とある。祖父は同年九月に死去、トシは死の意義を更に深く考え、やがて賢治の勤める信仰に納得して兄と同じ頃に入信したのであろうか。思慮深く軽率な行為などとれないトシが兄に勧められたとしても父の反対している信仰である。余程の決心があったに違いない。にも拘らず入信後二ヶ月前後しか経っていない大正一〇年一月二三日無責任にも賢治は無断上京してしまったのである。

トシの心痛は如何ばかりであったか、想像に余りある。その時、やっと大病が癒えたばかりの病弱なトシは母校花巻高女の教諭となつて四ヶ月しか経っていなかった。今と違い厳しい男性社会であった筈の職場で家庭と英語という心労の多い二教科を担当する事は若い女性にとつてそれだけでも大変な毎日であつたと思われる。二月に入りたちまちトシの体に病の徴候があらわれている。心労と過労に耐えて、誠心誠意努力を重ねたのであろうが遂に六月頃から病臥することになる、賢治の犠牲になつた様にさえ私には思えて痛ましい。

その年の九月トシは退職し、賢治は同年一二月稗貫農学校の教諭となり、やっと暗い生活から抜け出せた。しかしトシの病は好転せず翌一一年七月六日町中の暑気を避けて実家の病室より環境のよい下根子桜の別宅へ転住する。賢治もそこから農学校へ通うことになった。それに妹岩田シゲが同居して看病することになったのである。

父のもとでは思うように出来なかつたであらう信仰が今度こそ誰憚ることなく読経も唱題も思う存分出来るのである。絶好のチャンスであつた。早速御本尊は別宅に御奉安されるものと私は信じた。勿論トシこそ切望したことであらうに。どこを探してもその形跡(記述)はない。それどころか、農学校同僚の堀籠文之進は

「宮澤さんは、わたしの下宿にしょっちゅうやって来ました。(一週間に二回ほど、多い時は三回も四回も年譜は記している。)(中略)とし子さんの亡くなる近くで、とてもとし子さんの苦しんでいる姿をみるに忍びなくて気をまぎらすために来るようでした」(『年表・宮澤賢治』山内修編八〇頁・森荘巳池『宮澤賢治の肖像』より)

宮澤賢治の法華信仰を問う

と語り、又同じく同僚白藤慈秀に無断上京直前のように唱題行をして歩けるかと問われたのに対し、

「いまなら歩けませんよ」「心境が変わったから」だと笑って答えた。〔『同右書』七七頁〕

と云うのである。賢治の「まこと」はどこへいってしまったのか。ファナティックと云われるまでに燃え親友に説いた法華信仰はどこへいってしまったのか。あれは、一体何だったというのだろうか。

「春と修羅」第一集に初めて妹が登場する。

『恋と熱病』

けふはぼくのたましひは疾み

烏さえ正視できない

あいつはちやうどいまごろから

つめたい青銅ブロンズの病室で

透明薔薇ばらの火に燃される

ほんたうに けれども妹よ

けふはぼくもあんまりひどいから

やなぎの花もとらない

と詠んでいる。

〔『校全』二卷一九頁〕

この詩は大正一一年三月二〇日の日付がある。親友嘉内との訣別から八ヶ月が過ぎ、妹トシの死の八ヶ月前に当るこの日、賢治は消しても消しても湧き起る懊悩に耐え切れず、学校から真直帰宅できないまま林の中へさまよい込んだのであろうか。そこは妹の愛して止まない自然の中である。結核を病む妹の病熱は必ずぼうぼうと燃えるように上っ

ていく夕刻、目の前の芽吹き柳を見舞ってやれば、その苦しさが少しではあっても和らぐことをよく知っている賢治である。けれども今日はそれさえ出来ない程にぼくの心は苦しいから、やなぎの花もとらないで帰ると云う。魂が疾む程の賢治の苦しさは恋のためであると告白(？)し、妹の苦しさは死に至る病、結核の病熱であるとしている。

大正十一年、五月二一日に詠んだ

『小岩井農場パート 九』

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんとひとと万象といっしょに

至上福しにいたらうとする

それがある宗教情操とするならば

そのねがいから砕けまたは疲れ

じぶんとそれからたったもひとつのたましひと

完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする

この変態を恋愛といふ

もうけっしてさびしくはない

なんべんさびしくないと云ったところで

またさびしくなるのはきまっている

けれどもここはこれでいいのだ

宮澤賢治の法華信仰を問う

(・印は筆者) (『校全』二巻八五、八六頁)

この恋愛と『恋と病熱』の恋とは同じものをさしていよう。余人をまじえず自分ともう一人の、即ち二人だけが他の人を加えないで一つ目標に向って寄り添い最後まで一つ道を歩き続けたいと願うことは宗教上の道に反する恋態であって恋愛だと云う。共に輪読会に集っていた求法の友を見捨て（本心は）たった一人の友を求めて嫌悪する家業から逃れでて、無断上京という法華者にあるまじき行為に走ってしまったことを彼は、そのねがいから砕けまたは疲れたと分析している。が懺悔には至らず、けれどもここはこれでいいのだ、で終っている。

大正十一年（一九二二）十一月十九日再び、トシは実家の病室に帰らなければならないことになった。その病室は隣家から買い取った粗末な建物で、すきま風になやまされるので一年中屏風を立て蚊帳かまをつるありさま。暗く陰気なその部屋へ帰ることが決まった時、トシは次の様にいつている。

「あっちへいくとおらゝ死ぬんちゃ。寒くて暗くて厭な家だもな」

と。賢治はトシがこの様に自分の死を予知したことを知っていたのだろうか。

トシの悲しい予感の適中は、家族にとつては、慚愧に耐えないことであつたらう。実家に帰ってわずか八日目の一月二七日は朝からみぞれの降る寒い日だった。トシの脈は十秒に二つしか打たず、医師より命旦夕に迫るを知らされ、家中が緊張して見守った。幼少の頃から父にとつてトシは自慢の娘であつた。その大事な愛娘が闘病生活の甲斐もなく、今、正に此の世の生を閉じようとしているのを見ては余りにも哀れで思わず、

「とし子、ずいぶん病氣ばかりしてひどかつたな。こんど生まれてくる時は、また人になんぞ生まれてくるなよ。」と、いつてしまった。トシは、

「^①こんど生まれてくるたて、こんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまなあよに生まれてくる」

（また人に生まれて来る時は、こんなに自分のことばかりで苦しまないように生まれてきます。）

と答えている。何というけなげな、何という美しい言葉であろう。

いよいよ最期は耳もとに口を寄せ力一杯叫んだ賢治の「南無妙法蓮華經」に送られて、二へんうなづくように息をして静かに逝った。大正十一年一月二十七日午後八時三〇分だった。安らかに正念にて佛の命に帰っていったトシ。短い一生であったけれども、願を今生で果すことはできなかったけれども、未来世の菩薩行へと開かれた美しいことばと共に確かに立派に全うされた臨終であったと私は信じている。

このことばの意味する所は、「次生は自分のことばかりでなく、人々の幸せのために役立つ人間として生まれて来ます。」という、次生（過去世、現在世、未来世と云う三世のうちの未来世の生をさす）への誓願である。

彼女は先述した祖父への手紙に、

「人の世はたかだか五十年七十年、その間に喜んだり悲しんだり致し候ても一寸の間の夢の様なるものかと思はれ候、その短き間の事のみ熱心に何のかのと立騒ぎて候ても死んだる後この自分がいかになるかを考ふる人の少きは誠に間違ひたる事と存じ候。（中略）此の世の命を終へ、身体はなくなり候ても自分の魂はいつまでもあるものと私は信じ居り候。そんならバ如何にして死後の世界に居るかと云ふ事を考へし時は、全・く・居・て・も・立・つ・て・も・居・ら・れ・ぬ・苦・し・き・思・ひ・が・致・さ・れ・候。（中略）この悪い所だらけの私がかもし今晚にも不時の天災に逢ひ死ぬ様な事にあい候時はいかに致し候べきか、只悪しき事のみ続けたる報ひとして地獄に墮つるより外致し方なく候」（以下略）とも書いている。

（・印筆者）

その日から丁度五年五ヶ月の年月を経て迎えた自分の臨終において、かくも毅然とした誓願が立てられたと云うことは、激しい病苦とやる瀬ない孤独に満ちた死に至る病の床を道場として透徹した心の眼を開き自分の生と死をみつめ尽して、体力や思考力の及ぶ限り、法華經典や日蓮聖人の御遺文に学んだのではないだろうか。その様な記録は何

一つ目にしていないが、充分あった一人だけの時間をトシは決して無駄にはしていないと思うのである。

さて、前述のことばの意味にもどると、今世から次生への間には、死後の世界・霊界があり、霊魂としての霊界での生がある。祖父への手紙で自ら「地獄に墮つるより外ない」と述べた世界であるが、臨終のことばには、そのことに関する懸念は微塵も感じられない。道場と化した病床において一心に励んだ行学二道の修行によって彼女の法華経への信は決定していたに違いない。

宗祖大聖人は仰せになっている。

「かしこきも、はかなきも、老いたるも若きも定め無き習也。されば先臨終の事を習て後に他事を習べし云々」

〔『妙法尼御前御返事』「定遺」一五三五頁〕

と、トシはうれしかったことだろう。かつて自分が考えたことを宗祖がしっかりと説いて下さっている。又、同御遺文に

法華経は実語の中の実語なり。真実の中の真実なり。(中略) 法華経の名号を持つ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いわずや無始の善根皆変じて金色となり候なり。〔同 右〕一五三六・一五三七頁〕

と、何と云う頼もしさ。蝕まれた体で最早や体力のいる修行はできないけれど心を法華経に添わせ、頭の中で、心の中で、声にならないかすかな声で、何故か共に唱えてくれることなくなくなった兄への疑念も打ち払い、只ひたすらに一心に唱え続けた様な気がする。そして命が尽きたその時は、病んだ体と別れ、御本佛釋尊や日蓮大聖人のまします靈山浄土へと急ぎ往詣したいと念じ続けていたのではないだろうか。

靈山浄土は見も知らぬ果てしない西方十万億土と云う彼方の宇宙にあるのではない。ご本佛釈尊の仏国土はこの娑

娑世界、我等の天体、即ちこの地球上である。「常在靈鷲山」と寿量品に説かれる様に常にご本佛が、宗祖日蓮聖人も又共にまします浄土なのである。

次生への誓願をしっかりと魂に染み込ませ靈山浄土へ往詣した靈魂がそこ、靈界に於て御本佛や宗祖の教化を仰ぎながら始めなければならぬ修行は、その誓願を確かに成就させるための準備としての修行であろうかと思う。法華經にはめぐり会えたがトシにとっては短命であったため今生でなし得なかつた滅罪（特に無始已来の謗法滅罪）の行と、より功德を積むための善根に励まねばならないのではないだろうか。今生に於いて常に善意に満ち、真摯に生きた上に法華經を信じた大善によって靈界でのそれらの修行は支障なく進捗することであろう。準備としての修行を終えおわった時、次生の誕生が叶うにちがいない。

三世をくり返し生き続ける魂を以て法華經へのより深い信に導かれていく道筋を病の床で感得したからこそ、トシは死の五年前、祖父に手紙を書いた頃には、あれ程不安を抱いていた自分の死後について、信仰篤い父親らしからぬ（あまりの悲しさに心が顛倒していたのだろう）見当違いのいたわりのことばに、微塵の動揺も見せず、立派に毅然としたことばを返すことができたのであろう。

この美しいことばを賢治は「あめゆじゆとてちてけんじゃ・あめゆきをとってきて下さい」と^⑧(Ora Orade Shitori eguno・わたしはわたしでひとりいきます」という、いずれもトシの語ったことばと共に『永訣の朝』に詠みこんでいる。

危篤状態に陥った後、約十二時間トシの意識は明瞭であった。はりつめた空気の中で家族と交わしたトシの言葉は、愛する家族へ遺した魂からのメッセージとなった。賢治の悲しみは、信仰に揺らぐ修羅となり、病中のトシに対して不実であった自らへの胸えぐる自責の念と重なり悲痛の極みに達していった。最早や書く以外に耐える術を失った賢

宮澤賢治の法華信仰を問う

治。この様な状況の中で「永訣の朝・松の針・無声慟哭」の三篇の挽歌は一気に書かれたように思える。殊に「永訣の朝」に詠まれた①②③、三つのことば―信仰や愛や善の結晶した―トシのことは賢治の心を深め、浄め一時修羅を越えさせている。「ありがたう わたくしのけなげないもうとよ。わたくしもまっすぐにすすんでいくから」と。書き上げた挽歌に濾過されてやっと、いまわの際のトシへ賢治は心からの『お題目』を届けることができたのである。

兄が失っていたお題目を呼び覚ましたギリギリの一瞬トシの生命の火は消えていった。

四、宮澤賢治と親友保阪嘉内

- (1) 二人の出会いと嘉内の爲人

保阪嘉内、宮沢賢治が若しこの人と出会っていなかったら、後生の私達が今、この様に共有している宮沢賢治その人は存在していなかったのではないかと思う程、賢治の生涯に大きな影響を与えた一人の奇縁の人であった。

やはらかに柳青める北上に

われむかはんと心勇めり

右は大正五年（一九一六）四月九日、盛岡高等農林学校（以下高農と略す）に入学のため郷里山梨から盛岡への旅立ちの日に詠んだ歌である。自啓寮に入り、室長だった賢治と対面した彼は、そこで入学理由を「トルストイを読んで百姓の崇高さを知り、それに浸ろうと思ったから」と述べ、賢治は「トルストイに打ちこんで進学したのは珍しい」

と評したと云う。

(保阪庸夫 編『宮沢賢治友への手紙』(筑摩書房) 一六頁)
小沢俊郎

彼は入学間もない五月一七日には自啓寮懇親会上演するための『人間のもだえ』と題する戯曲を書いている。而も配役も次の通り嘉内が自分で決めたと云う。室長の賢治一人が二年生で他は全員新入生であった。

- ・全能の神アグニ(保阪)
- ・全智の神ダークネス(宮澤)
- ・恵の神スター(岩田)
- ・土人(伊藤)
- ・英雄(萩原)
- ・女(原戸)と、

一番いい役を自分に当て、五月二〇日に上演。尚この時のアグニのことは、後世、賢治を語るキーワードとして有名な『修羅』と云う語を「(人間界は)法の燈輝かぬあの修羅の国だ」と語らせている。短歌で日記をつけ、トルストイをはじめとする内外の多くの文学作品を愛読していた多芸多才の嘉内の存在は異彩を放っていたと伝えられている。賢治にとってそれは大きな驚きであり、彼への関心は日々に高まっていったに違いない。

翌大正六年(一九一七)小菅健吉、宮澤賢治、保阪嘉内、河本義行の四人が中心メンバーとなって文芸同人「アザリア会」を結成し七月一日同人雑誌『アザリア』第一号を発刊している。

『アザリア』誌上を舞台に四人のうちでもとりわけ賢治と嘉内は、二人が共通した願いを持つことに気づき、更に共感しながら友情を深めていった。(・印筆者)賢治の願いは『まこと』で「他者の幸福のために生きる」こと、そのためには「如何なる自己犠牲をも厭わない」とするものだった。それは法華経勸持品で説かれる「不惜身命」や「我不愛身命 但惜無上道」又、如来寿量品に「不自惜身命」と説かれる教えによって自らに課した願いであろうと思つ。

一方嘉内のそれは、高農入学前から既に自らに誓っていた願いで、「農村へ行こう。トルストイのように自分を犠牲にしよう」というもので、自己を犠牲にして「百姓をせよ。そして我々のハッピーキングダムを作れ。パラダイ

スを作れ」と述べていたものだった。

『宮澤賢治友への手紙』(二〇八・二〇九頁)には更に具体的に「嘉内の少年期、殊に明治三九年四三年の水害は記録的なもので、この惨状を目にした事が、その後の生涯に大きな影響を与えている。(中略)」嘉内の少年期の抱負は、荒れ果てた村々を美田で埋め尽す事であったと云う。

と述べられている。ここに、嘉内の願いの因って来たる原因が実に明瞭に述べられている。更に盛岡高農に入学する際、嘉内にはより具体的な目的があったことが記されている。

嫌悪する家業と相剋の父とから離れ、自由に好きな学問と文芸に打ちこめる、而も打てば響く異体同心の友を得て、賢治の高農時代の日々はどんなに輝いていたことだろう。

無二の親友と至福の時を過ごした日の思い出がこの後の賢治にどう影響していったか、次に書簡を通して考察していきたい。

賢治の書簡一覧表（大正5年～10年）

年	T五年	T六年	T七年	T八年	T九年	T十年	合計
父	0	1	(3) 36	45	5	(2) 2	(5) 89
嘉内	5	9	(7) 21	9	(3) 14	(6) 13	(16) 71
高橋	5	3	0	0	0	0	8
関	0	0	0	0	0	3	3
トシ	0	3	0	0	0	0	3
その他	0	0	(1) 5	2	2	(1) 2	(2) 11
合計	10	16	(11) 62	56	(3) 21	(9) 20	(23) 185

(2) 賢治の信仰実態―嘉内への書簡から―

・右は本文末記載の書簡グラフを図表にした。数字は書簡数。

()内は折伏に当ると思われる書簡の数。

- ・大正五年四月から一〇年二月までの五年九ヶ月の間に賢治が出した合計一八五通のうち父への手紙が八九通で一番多いがそのうちの四六通はトシの病状報告を主としたものであった。
- ・普通の書簡としては嘉内宛の七一通が最も多い。尚嘉内宛の手紙は全部で七二通。残りの一通は大正一四年六月二五日に出している。(返信)
- ・高橋秀松は、賢治と高農同級生。
- ・関徳弥は親戚で同信の友。同信の故、彼の書簡内容については関与しない。

大正七年（一九一八）、賢治は盛岡高農を卒業したが研究生として学校に残り、嘉内は最高学年生として共に高農で交友を深める筈であった。ところが善意に満ちた希望を掲げ明るい未来を信じていた嘉内の上に、晴天の霹靂のように三月一三日「除籍処分」と云う不幸が襲ったのである。アザリアに載せた記事による筆禍らしいが理由は明かされないまま退学となる。

賢治は翌三月一四日、書簡(49)を嘉内に送った。続いて書(50)（T7、3、20前後）を送り、

何とかして純な真の人々を憐れむ心から総ての事をして行きたいものです。そうすることばかりが、又私共自身を救ふの道でせう。（中畧）南無妙法蓮華経と一度叫ぶときには世界と我と共に不可思議の光に包まれるのです。

（中畧）先づあの赤い経巻は一切衆生の帰趣である事を幾分なりとも御信じ下され本氣に一品でもお読み下さい。と法華信仰を勧めている。妙法蓮華経と唱えて輝く光に与ることによってのみ、理不尽な措置に対しても自暴を起さずに乗り越え、新しい真実の道が求められるのだと励まし、自らが、かつて初随喜の感動を得た『漢和対照 妙法蓮華経』を送り、その一品でも読んで欲しいと語っている。

嘉内の衝撃は計り知れなかったであろうが、性来の積極性と旺盛な向学心で逆境をはね返し、あらためて北大農学部への入学を決意した。そして、翌春の受験に備えて一まず明治大学に入学して在京中であつた六月一六日今度は母の逝去と云う前にも増して大きな悲しみが降りかかって来たのである。

その時賢治は嘉内に三通の書簡を送っている。書(74)（T7、6、20頃）、書(75)（6、26）、書(76)（6、27）である。書(74)では御題目・南無妙法蓮華経を二八回といねいな楷書で書いて悼み、書(75)では如来寿量品の写経供養をすすめる、書(76)は、「阪阪さん、諸共に深正に至心に立ち上り、敬心を以て歓喜を以てかの赤い経巻を手にとり静にその方便品、寿量品を読み奉らうではありませんか。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。」と、経巻読誦をすすめて母を喪った友

「古い布団綿、あかがついてひやりとする子供の着物、うすぐろい質物、凍ったのれん、青色のねたみ、乾燥な計算、その他」

と述べている。それは、賢治が日々目の前にしている質・古着商の現実とその家業を嫌悪する賢治の暗く冷たい印象をなймаせて描いた店先の光景である。その店先の向こうにありありと見えるものこそ彼が共に救おうと友に呼びかけた憐れな衆生の現実の姿である。若しほんとうに愛があるなら、信があったなら、目の前の憐れな衆生にかける豊かな心やさしい思いによって、賢治の生活はもっと明るくなったのではないだろうか。

云いようもない暗い生活からどうしてもぬけ出したかった賢治は大正九年の夏、久し振りに出した嘉内への返事、書(166)(T9、7、2)で、次の様にあらためて信仰表明をしている。

「ケレドモ今日ニナツテ實際ニ私ノ進ムベキ道ニ最早全ク惑ヒマセン。云々」

と、わざわざ片仮名書きされたこの手紙の内容は「信仰に関する重要な告白として注目される。」と年譜(『校全』一四卷一五二―二六頁)は記している。

こうしてあらためて法華者としての自覚に立った彼は、心機一転次のような実践活動を起こし励み出したのである。

。はじめの街頭唱題。(T9、10、23)。国柱会(信行部)に入会。『法華経』『日蓮聖人遺文』の輪読会。(メンバー 賢治・トシ・岩田豊蔵・同シゲ・同徳弥(関)・同なお・梅津セツ・及川友三・由良キミ(六く九人))。街頭唱題(寒修行)。『撰折御文』『僧俗御判』作成等。

輪読会メンバーの岩田シゲは賢治の妹で、梅津セツは母方の叔母であった。この叔母は父に反抗しての賢治の行為に対し、他の大人達は関わることを避けた中で一人法華経と日蓮聖人を奉じ信心を深めようと努力した人であった。賢治の法華経信仰の頼母しい援護者で、自宅を会場として使用することから、会員の勧誘まで積極的に協力した方であっ

た。この叔母は賢治の無断出京後、法華経への信が薄らいだと伝えられている。

(書₍₁₉₅₎ (T 10、7、13) 同校異五五四頁)

国柱会への入会は、大正九年の晩秋で、そのことについて賢治は嘉内に書₍₁₇₇₎ (T 9、12、2) で、
今度私は

国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は

日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。謹んで此事を御知らせ致し恭しくあなたの御帰正を祈り奉ります。

日蓮聖人は妙法蓮華経の法体であられ田中先生は少くとも四十年来日蓮聖人と心の上でお離れになった事がないのです。(中畧) 田中先生に妙法が実にはつきり働いているのを私は感じ私は信じ私は仰ぎ私は嘆じ今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対服従致します。(以下畧)

と報告して、帰正をすすめ、立て続けに書₍₁₇₈₎ (T 9、12、上) を送り、重ねて次のように入会をすすめている。

只 末法の大導師

絶対真理の法体日蓮大聖人を無二無三に信じてその御語の如くに従ふことでこれはやがて無虚妄の如来 全知の正偏知 殊にも 無始本覚三身即一の妙法蓮華経如来 即ち寿命品の釈迦如来の眷属となることであります。

どうです一緒に国柱会に入りませんか。一緒に正しい日蓮門下にならうではありませんか。諸共に梵天帝釈も来り踏むべき四海同帰の大戒壇を築かうではありませんか、私が友保阪嘉内、私が友保阪嘉内、我を棄てるな。(中畧) 日蓮主義者。この語をあなたは好むまい。私も曾っては勿体なくも烈しく嫌ひました。但しそれは本当の日蓮主義者を見なかった為です。

（ ）印は筆者、〳〵のことは本文一、二頁、田中香浦師の賢治評中のことばとして使われている）

と、大正七年の嘉内への祈伏は成就しなかった。今度こそは必ず成就させたいとの意気込みは感じられるが果してこの様な語りかけが嘉内に届くだろうか。この二通の書簡を出した翌大正十年一月二三日彼は突然、無断上京したのである。折角はじめた実践活動はどうなるのだろうか。なすべきでない行為であった。勿論彼の意識の中には悪いというよりむしろ使命感に燃えた行為と位置づけてはいる。然し、それは独りよがりな僻見であろう。継続してこそ価値のある実践活動をはじめた以上、主催者としてはその活動を継続し発展させる道義上の義務や責任がある筈だ。まして、布教を志す者としては慎^つむべきであらう。この時、彼の心中にあったのは「私が友保阪嘉内 私が友保阪嘉内 我を棄てるな」と懇願し、哀願した嘉内唯一人だったのかも知れない。何となれば前年嘉内に宛てた書⁽¹⁶⁸⁾⁽¹⁶⁹⁾⁽¹⁷²⁾において既に、来春、即ち一〇年の春には上京する予定だと伝えていたからである。

そんな賢治の無断上京に一番心を痛めたのは家族のうちでたった一人同信のトシであったに違いない。心やさしいトシにとって板ばさみの苦しさがどれ程酷^むいものであったか、トシ没後の行動からみても賢治にはわかっていなかった様な気がする。又、一番失望されたのはセツ叔母ではなかったかと思うのである。単に賢治個人への失望に止まらず、賢治の行為は法華経への疑念を呼び起こし、法華経を傷つけることにならなかつたと断言できるだろうか。

書⁽¹⁸⁸⁾ (T 10、2、18) 嘉内宛葉書

本化日蓮大聖人 斯の人間に行じ給ひて 能く衆生の闇をば滅す。云々

・ 緑よ緑よ燃ゆる熱惱の砂漠今し清涼鬱蒼の泉地と変ぜよ 焦慮悶乱憂悲苦惱総て輝く法悦と変ぜよ。

至心に願ひ上げます。どうか世界の光栄天業民報をばご覧下さい。

と記し、本書簡と前後して国柱会発行の日刊新聞「天業民報」一部と、その案内書、購読申込振替用紙が送られてい

るが嘉内は振替用紙に記入もせず申し込まなかったことがわかる。因みにその案内書を見ると、

現代思想の動搖甚しき今日に在っては（中畧）吾が建国の精神を考察し其の使命のあるところを開明し依て以て世界の濁濁（にごたぐ）を清め時代の艱難を救ふの外無之候云々、田中先生の唱導にかかる日蓮主義開頭日本国体説によって始めて日本民族としての使命を知り人生の意義を了するを得て闇夜に燈を得たる感有之候云々

〔『校全』一三卷「校異」五五〇・五一頁〕

と云った調子で田中智学師の日蓮聖人に名を借りた国家主義的思想が明示されている。

天業民報の用紙は緑色だった。賢治は、緑よ緑よと熱く叫んで天業民報を称え、その購読を勧めている。打てば響くように購読申込票は来ると信じていた筈だ。然し嘉内はどこまでも主体的であった。できることなら共に歩みたいと真剣に考えはしているが、納得できない内容のものは誰が勧めようと自分の意志に反してまで妥協することはできなかった。二人は高農時代同じねがいを持ったことによって固く結ばれた無二の親友であったが、この様に一方では極めて対照的な性格を持っていた。ここでの嘉内の明確な意思表示は入信拒否の表明でもあった。賢治にもそれがやっと通じたのではないだろうか。

書(191) (T 10、3、10) を送った宮本友一（天業民報を購読している高農同級生）に賢治は

「どの宗教でもおしまひは同じ処へ行くなんといふ事は断じてありません。間違った教による人はぐんぐん獸類にもなり魔の眷属にもなり地獄にも堕ちます。（中畧）しっかりしっかり頼みますぜ。」

と、肝心の法華経の教えに触れることもなく獸類や、魔の眷属や、地獄と乱暴にたたみかける様な語り方は、お粗末な新興宗教の嚇し文句の様で不快である。又これを折伏であると考えたら大間違いであるといわねばならないだろう。嘉内の心の変化を感じ取り、賢治の心の焦りやいらだちが増して来たせいだろうか。

宗祖大聖人は『崇峻天皇御書』（「定遺」一三九〇～一三九七頁）の結文にて、

「一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり。不輕菩薩の人を敬しはいかなる事ぞ。教主釋尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」

と、お諭し下さっている。詳しく書く紙面はないが、折伏とかかわること故少し触れたい。

遠い昔、世の中に増上慢の比丘が充ち溢れた時、一人の不思議な菩薩比丘が現われた。その比丘は經典の読誦もせず、微頭徹尾常に

「我深く汝らを敬う。」

「我敢えて汝らを輕んぜず。汝らは皆まさに菩薩の道を行ずれば必ず仏となる尊い身であるが故に」

と尊敬と不輕の礼拝行を実践された。その故に常不輕と名づけられたと經典に記されてる。その行為を不快に思う人達からどの様に憎まれ、罵られ、打ちたたかかれても、その迫害の場を避け走り去って、迫害の及ばぬ遠くに止って、尚一層声高く同じ様に唱え続けられたと云う。

不輕菩薩は本佛の「悉是吾子」の衆生、

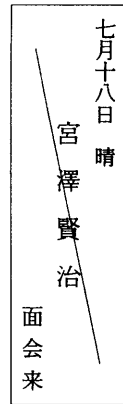
「一切衆生は本来から皆ぼさつである。」ところの衆生、

その衆生の佛身を讃えずにはおられなかったので自分を罵詈、打擲する当の相手に「あなた方はみんな本来からぼさつ、仏の子、成佛可能者」であると語り聞かせ、佛身の自覚を喚起して無上道に入らしめんとのみ欲した菩薩であった。それ故不輕菩薩の行じられた忍辱の礼拝行は、唯迫害に耐えて礼拝したのではなく、下種折伏の菩薩行であったと説かれている。不輕菩薩を過去世における弘經者の典型、模範とし、行者受難の先蹤と仰がれた日蓮大聖人は、今の私達に唱題下種のぼさつ行に励むよう四条金吾殿へのおことばを通して語り続けて下さっているように思える。

このようなことを賢治がきちんと受けとめていたら、彼の一生はもっと素直で大らかで嘉内と訣別することもなく、それ故修羅と化することはなかっただろう。当然、それぞれの仕事に従事して、共に法華経信仰をも立派に全うできた筈だから。

(〇〇筆者)

大正一〇年(一九二一)七月十八日、嘉内の『国民日記』この日の紙面に



上図のように頁一杯大きく書いた字を斜線で抹消している。

(「宮澤賢治 友への手紙」一八三頁)

書(194)(T 10、7、3)にて賢治は嘉内に面会を申し込んでいる。前記嘉内の日記はその面会を果した日が七月十八日であり、その日二人の訣別が決定的なものとなったことを示している。二人の願いは共通であり接点は共有していたが、その内容に於て大きく違っていた。嘉内のそれは実生活に根差した確かな手ごたえがあった。然し賢治のそれは、観念の中のことはから生れ、現実の生活にかかわることもなく、いつまでも観念のままであったように思える。(自分の目の前の憐れな衆生の悲惨な現実を認識することさえ出来ない程)それ故この訣別はむしろ当然であったと云えるかも知れない。

書(196)(T 10、7、下)は賢治が一生のうちで最後に書いた折伏の手紙である。(少々抜粋しておきたい)

「どうか一所に参らして下さい。わが一人の友よ。……やがてこの大地このまま寂光土と化するとき何のかなしみがありませんか。」「あなたは今この次に、輝きの身を得数多の通力をも得力強く人も吾も菩提に進ませる事が出来

宮澤賢治の法華信仰を問う

る様になるか、又は涯無い暗黒の中の大火の中に墮ち百千万劫自らの為に（誰もその為に益はなく）封ぜられ去るかの二つの堺に立ってゐます。間違つてはいけません。」「信じ給へ。求め給へ。あゝ、「時だ」と教へられました。

「機」だと教へられました。」二云々

と、最後の最後まで、「私が友保阪嘉内、たった一人の私の友 我を棄てるな」と叫び続けた賢治であった。しかし、全てを賭けて、求めた賢治の夢は儂く潰え、最早東京に留まる意味は消え去つたのである。彼は書簡(193) (T10、6、29)で母宛に「やはり私が、数年間、帰る事が必要ならば、すぐにも戻ります。」といい、関には「十月頃には帰る予定ですが、どうなりますやら」と書(197) (T10、8、11)にて、空しくつぶやいている。

折しも折り八月中旬、「トシビヨウキスグカエレ」と家からの電報が届く、急きよ帰宅の用意をし、大トランク（ズックの）を買い原稿をぎっしり詰めて賢治は帰宅するのである。

トシが咯血したので知らせたが帰宅時は小康状態だったので「今度はこんなものを書いたのどもや」「わらしこさえるかわりに書いたのどもや」といって読んで聞かせたと云う。トシはどんな思いで、この言葉を聞いたのだろうか。父や家族の帰止のことなど夢のように忘れて、悪怯れる気配さえも無く……私はまだ賢治がよくわからない。

(・印筆者)

五、おわりに

賢治に関わつて来た間中、私はいつも巨象に触れて戸惑う目の見えない子どもの様な思ひだった。

彼は大正一二年八月二日に詠んだ『宗谷挽歌』の中に尚も

われわれが信じ／われわれが行かうとするみちが／もしまちがひであつたなら／究竟の幸福にいたらないなら／いままっすぐにやってきて／私にそれを知らせて呉れ

『春と修羅』補遺（『校全』二卷二五一頁）

と、法華經への疑念のにじみ出たことばをのこしている。正しい教えに帰依し、深い信仰があれば外的条件に左右されて簡単に心情が変転することなどはないだろう。逆境にも順逆にも動じない真の自己を確立するための営みこそが信仰ではないだろうか。彼の特異な感性と鋭い直感力と云う二つの特性は、彼の天才性を開顯する上では効を奏したが、深い思索を退け、その時々^{ときどき}の状況に敏感に反応して思想も感情も共に揺れ動く異常さは信仰の成熟を妨げていたように思える。

「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と、熱く語つた彼のことばは有名であるが、このことばは真実を表わしているだろうか。よそよそしい権力の表象のような虚しさを感じられるのは何故だろう。彼は、重い病床に臥していた妹の深い悲しみに共感することができなかった。そして又、手放せば忽ち困る必需品をも質に入れねばならぬ程に貧しい人たちの苦しみを思いやることさえできず平然と忌避した異常さを持つていた賢治。その冷たさがこのことばにも肝心な個人への思いを切り捨てるかたちで顯われている様に思う。

では、世界全体の幸福について法華經ではどの様に説かれているのだろうか。それは法華經の説く仏智『一切衆生悉ぼさつ』と宗祖の大願『一天四海皆歸妙法』の中に説き尽されている様に思う。図らずも二つの聖語の真中には「皆」の文字が位置している。この「皆」はかけがえのない個人・一人ひとりが集つたすべてのもの、一人ももらさぬ全ての人をさしている。老いも若きも、男も女も、貧者も長者も、悪人も善人も、弱者も強者も誰一人余さぬ全てをさしている。

この徹底した一切衆生の、而も本来よりぼさつであることを説く法華經。このことこそ「世界全体の幸福」と云う

概念を支える根本的不可欠な要素ではないだろうか。一切衆生の成仏を説く『妙法・南無妙法蓮華經』に向って、ぼさつたる衆生が合掌し「南無妙法蓮華經」と唱える一ぼさつ行を行ずる一世界。そこそを淨仏国土と呼ぶのだから。妙法に帰依し、南無妙法蓮華經と唱える衆生が多く集まれば集まる程、仏国土は広がって行くことになる。だから若し、全ての人が皆妙法に帰依してお題目を唱えたならば一天四海、即ち全世界は仏国土と云うこの上なく幸せな淨土となるに違いない。お題目を唱えることは、即ち成仏に至るぼさつ行の実践である。言い換えれば、唱題は自らの人格完成（成仏）という人類の理想を目指して、迷わず真っ直ぐ歩いている姿といえよう。だから、そのことを本当に自覚し、行じ得るならば、宗祖が「法華經修行の者の所在の處を淨土と思ふべし」（『守護国家論』「定遺」二一九頁）と仰せの如く、その人の所住の所は、至福の時空（仏国土）と化するであろう。例え、彼或は彼女が現身に貧苦や病苦或は障害を持つ身であっても、それらのこととは全く無関係にである。

このような世界は自分の利益追求を優先する社会においては絶対成就することはないだろう。唯一つ宗教の領域においてのみ論じることの可能な世界である。而も厳しく異端を攻める一宗教においてはそもそも叶うことではない。仏教においても『一切衆生皆悉ぼさつ・仏智』を明かす法華經でなければならず、法華經に於ても三世法界唯一の教説である『本地本門八品上傳所伝本因下種の南無妙法蓮華經』でなければならぬと宗祖はお教え下さっている様に思う。

では『一天四海皆歸妙法』成就への道はどうあるべきか。それは妙法を信ずる一人ひとりの全ての人がまず自分の存立する一隅を原点に顕靈一界の成仏を念じ懈まず下種折伏の御題目を唱え続けていくことに尽きるのではないだろうか。

『本門八品 上傳所伝 本因下種の南無妙法蓮華經』と成仏に至る永劫の未来まで。

本論からこの小論に至るまで直接お導きいただきました大平先生と、当宗教学や法華経思想について一からご指導
下さいました学林の先生方に心からの感謝を捧げつつ…

註

合掌

。底本は『校本 宮澤賢治全集』（十四巻・十五冊）築摩書房（昭和四九年二月）
。参考文献

- ・『昭和定本 日蓮聖人遺文』立正大学日蓮教学研究所・身延山久遠寺
- ・『日蓮聖人遺文辞典』（歴史篇）等辞典類
- ・『法華経一仏乗の思想』荻谷定彦・東方出版（一九八三年・昭和五八年）
- ・『法華経』上中下 岩波文庫
- ・『宮澤賢治 友への手紙』保阪庸夫・小沢俊朗編・筑摩書房（一九六八年・昭和四三年）
- ・『年表作家読本 宮澤賢治』山内修編・河出書房新社（一九八九年）
- ・『評伝 宮澤賢治』境忠一、桜楓社（一九七五年・昭和五〇年）
- ・『宮澤賢治「妹トシへの詩」鑑賞』暮尾淳・青娥書房（一九九六年）

宮澤賢治の法華信仰を問う

宮澤賢治・妹トシ保阪嘉内の関連事項と賢治の書簡グラフ一覧表

大正5年(1916)	年	
<p>二十才 盛岡高農二年生 。自啓寮南九室々長 。新入生保阪嘉内の入学理由 に対し、 「トルストイに打ちこんで 入学したのは珍しい」と話 す。 。夏休み中に五通の書簡を嘉 内に送る。 （高橋秀松は賢治と同級生。 この年、高橋宛書簡も五通 あるが、翌年は三通に減り、 以後は皆無である。）</p>	<p>宮澤賢治 M 29、8、27 生 S 8、9、21 没 享年 37 才</p>	
<p>12 11 10 9 8 7 6 5 4</p>	<p>月</p>	
<p> <input checked="" type="checkbox"/> 15 <input checked="" type="checkbox"/> 24 <input type="checkbox"/> 16 <input type="checkbox"/> 17 <input type="checkbox"/> 18 <input type="checkbox"/> 19 <input type="checkbox"/> 20 <input type="checkbox"/> 21 <input type="checkbox"/> 22 <input type="checkbox"/> 23 </p>	<p>賢治の書簡グラフ (校全十三巻より、 数字は書簡番号) ○…嘉内宛の書簡 △…父 ◇…トシ ⊕…高橋 ☒…関 □…他の人 ●…法につ いて少しふ れたもの ▲折伏に ■該当するもの</p>	
<p>十八才 四月日本女子大家政学部に入 学。 日本女子大寮監 月山寛氏のトシ評 「トシさんはいたって静か で大きな声など出さない。 実にしつやかな人で、古い 時代の美德とされていたよ うな人柄でした。だからあ まり目立たない。でも、頭 がよくて、その点では有名 でした。」 (山口修編「宮澤賢治」四三 頁)</p>	<p>宮澤トシ M 31、11、5 生 T 11、11、27 没 享年 24 才</p>	
<p>二十才 盛岡高農農学部第二部に入 学。自啓寮に入室(賢治と 同室) 。入学理由を「トルストイを 読んで百姓の仕事の崇高さ を知り、それに浸ろうと思っ たから云々」と述べる。 5/17 同室者をあてはめて、 戯曲「人間のもだえ」を 書く。戯曲の中で全能の神 アグニに「(人間世界は法 の燈輝かめあの修羅の国だ)」 と語りさせている。 5/20 「人間のもだえ」は 自啓寮懇親会に於て上演さ れている。</p>	<p>保阪嘉内 M 29、10、18 生 S 12、2、8 没 享年 40 才</p>	

大正 6 年 (1917)

二十一才 高農三年生

7/1 小菅健吉、宮澤賢治、
保阪嘉内、河本義行の四人
が中心メンバーとなって仲
間と共に創刊した文芸同人
誌「アザリア」第一号発刊。
7/7・7/8 夜、アザリ
ア会第一回小集閉会後の夜
中、四人は秋田街道を春木
場まで徒歩旅行する。
7/14・7/15 一週間後、
賢治と嘉内は二人で夜の岩
手登山をする。
その時の一首
『柏ばら／ほのほたえたる
たいまつを／ひたすら吹け
ば／火とおもほえず』
(この夜のことは以後の賢
治の書簡にてしばしば語ら
れる)

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
			○39 ○40	☑36 ○34 ○38	△34 ○35			○33	⊕32	⊕31	○25 ○26 ☑27 ○28 ☑29 ⊕30

十九才 女子大二年生

6/23 病床の祖父に宛てた
「生と死」を論じた長い手
紙の中に次の様なことが
ある。
「どうしても人の身体はな
くなり候でも、自分の魂は
いつまでもあるものと私は
信じ居り候。如何にして死
後の世界に居るかと言う事
を考えし時は、全く居ても
立っても居られぬ苦しき思
いが致され候」
「仏様は因果応報を御説き
なされ候とか……」
「よく今までの私のしたる
事を考え候時、どうしても
恐ろしくてたまり申さず候」
「私も大切な死後の事一
刻も早く心にきめる様に
思い居り候へど未だ確かな
信心もなく、このままに死
ぬ時は地獄にしか行けず候
何卒御一緒に信心をいただ
く様に致し度候」
(宮澤賢治「妹トシへの詩」
暮尾淳(一一九〜一二三頁))

二十一才 高農二年生

エピソード ①嘉内は中学上
級の頃、既に自然礼讃、農
村憧憬の思想を持ち、弁論
部員となつて「花園農村」
「美的百姓」「農業芸術論」
等と題する演説をしていた。
という。
(宮澤賢治友への手紙)保
阪庸夫・小澤俊郎編二〇八頁
。秋田街道、夜の徒歩旅行に
ついては「馬鹿旅行」と呼
び短歌六〇首ノートに書い
ている。
。岩手登山については保阪、
日記に「岩手山紀行より」
として短歌七九首を残して
いる。その中に
「松明が／たうたう消えて
／われら二人／牧場の土手
ノ／うえに登れり」がある。
上記賢治の歌と符合する。
。「共通の願ひ」を持った二
人の交友は次第に深まって
いく。

宮澤賢治の法華信仰を問う

大正7年(1918)

二十才
。父へはじめての折伏の手紙を書く。(二、三月に三通)
3/15 高農卒業。同時に「地質・土壌・肥料」の研究の為研究生として学校に残る。
。嘉内の退学に伴い、励ましと法華信仰を勧める。(折伏の手紙を送る。(書49・50)
。六月母を喪った嘉内に慰めと法華信仰を勧める手紙を三度送る。(書74・75・76)
6/30 岩手病院で受診。肋膜炎と診断される。
8/24 実験指導補助、解任。

12/26 トシ看病の為母と共に上京。
12/27 朝上野着。雲台館に宿をとる。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
△99 ○93 △100 ○94 △101 ○95 △102 ○96 △97 △98		○89 △90 □91 ○92	□84 △85 △86 △87 ○88		●83 △77 ○78 △79 △80 △81 ●82	△73 ●74 ●75 ●76	△67 △68 △69 △70 △71 △72	△60 △61 △62 ●63 □64 △65	△52 △53 □54 ●55 ○56 △57 ○58 ●59	△47 ▲48 ●49 ●50 ○51	△43 ▲44 △45 ▲46	○41 △42

二十才 女子大三年生
1/27 母への手紙
「あたりの人達を見ると、いろいろ自分で新しかったり、利己主義を構えたり、さまざまでございます。私自身の真似はせず、出来る丈夫大きい強い正しい者になりたいと思ひます。御父様や兄様方のなさる事に何かお役に立つやうに、そして、生まれた甲斐の一番あるやうに求めて行きたいと存じて居ります。」等。
(同右書、二二五頁)

11/24 兄賢治宛の手紙には「」にもかくにも真生活の方法と職業との一致の外に望ましき生活は考へられず候。一人一人も一家もその天職を見出して、之を遂げたくと折角願ひ居り候云々」(同右書、二二五、二二六頁)
12/20 発病。帝大小石川病院に入院。

二十才
3/13 高農「除籍処分」となる、アザリア五号に発表した「社会と自分」(『校全』一四・八五三頁)の一節による筆禍と考えられるが、理由は明されないまま退学する。
。明春、北大農学部への受験をめざし、その準備のため明治大学に入学する。(在東京)
6/16 母逝去。
。六月下旬に賢治から母の死を悼んでお題目を二八回浄書した書簡(74)と更に(74)計三通の手紙を受ける。
。九月、母の死によって北大受験を断念した嘉内はいよいよ農村入りを志し、その準備と勉強のため、上京し、年末まで滞京する。

大正8年(1919)

<p>二十三才 。滞京中(12/27、3/3) 父への書簡四六通。 (トシの病状報告他)</p>	<p>1/27 トシの病、快復に向かう。それを機に東京での就職許可を父に願ひ、一応承諾を得る。 。歡喜して就職準備等の画策に熱中するが、結局父の許可が出ず、トシと共に帰花する。(3/3)</p>	<p>。東京での自立の夢は破れ、質屋の店番の身を悲しむ、暗い生活に戻る。 (この時から家業に従事した失意の日々が続く。) 。この年、折伏の手紙は一通もなし。</p>	<p>。広重その他の浮世絵版画(錦絵)を数百枚集め、父の鑿窟を買う。 『校全』一四一五二〇頁下段・書函(T8、8、20頃)</p>						
<p>1 △103、△135 父への手紙三十三通</p>	<p>2 △136、△142 父への手紙七通</p>	<p>3 □143、□144</p>	<p>4 ○145、○146</p>	<p>5 □147、△148、△149、△150、△151、△152</p>	<p>6 ○153、○154、○155</p>	<p>7 ○156、○157</p>	<p>8 ○158</p>		
<p>二十一才 1/27 この頃より快復に向かう。 二月下旬 退院。雲台館にて静養。</p>	<p>3/3 母、叔母、兄と共に帰花。日本女子大は三学期全欠したが見込点がつづられ、優秀な成績で卒業する。 (校全第十四卷 五一―九頁)</p>	<p>(三月末、女子大賞善寮、寮監西洞タミ来花して、トシの卒業証書を届ける。)</p>	<p>。帰花後は家にて静養。夏期は西鉛温泉にて保養。 。賢治の短歌六六二首を浄書し、一冊にまとめる。</p>						
<p>二十三才 。いよいよ農人としての第一年春を迎え、意気軒昂である。(前掲 書一三七頁)</p>	<p>2/17 『新しき生命』というノートの副題に「農人日記第一巻」と記し、その中に「余はあらゆるものに教へられた」とし、その一つに「佛法の御題目である」と明記している。</p>	<p>6/27 『無表題』ノートにお題目を三段七行二回浄書している。 (同右書一三八頁)</p>					<p>12/1 一年志願兵となる。 (一年間在東京駒場)</p>		

宮澤賢治の法華信仰を問う

大正9年(1920)

二十四才 法華經に寄せる心も薄れ、延々と続く苦惱に充ちた日々耐えられなくなったのであろう。
 書(160)に(怒りに充ちて)殆んど狂人にもなりそうなの発作を機械的にその本当の名称で呼び出し手を合せます。人間の世界の修羅の成佛。そして悦びにみちて云々。と記し、続く。
 書(160)で改めて信仰告白をしている。(実践活動をはじめめる)
 10/23 はじめての街頭唱題をする。
 御遺文や法華經の輪読会をはじめめる(メンバー六、九人)(妹のトシ・シゲ(石田)参加)。
 晩秋の頃、国柱会信行部に加入。
 寒修行をして町内を歩く。
 書(177)にて、国柱会入会を知らせ、久し振りに嘉内へ帰正、入信をすすめる。
 三通の書簡(160)(172)にて来春上京の予定を嘉内には知らせている。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
●177 ●178 □179		△173 △174 △175 △176	○171 ○172	○168 ○169 △170	●166 ○167	●165	○163 ○164	○162	□160-1 □160-2 ○161	○159	

七十二才
 七月 盛岡川原町円光寺に寄宿し、洋裁の講習を受ける。
 9/24 九月二十四日付をもって母校花巻高等女学校教諭心得となり、英語、家事を担当する。
 (トシも兄と同じ頃、国柱会に入会か?)
 賢治主催の輪読会に都合のつく限り出席していたと思われる。

二十四才
 エピソード②賢治はアザリア第一号に短編「旅人のなし」から「を發表し、その中の一節に、「この多感な旅人は旅の間に沢山の恋をしました。女をも男をも云々」と書いています。
 それに対して嘉内はアザリア第四号に、やはり短編「打てば響く」を發表し、そこに、「ああしかし、誰がほんたうに私の心を汲んでくれるだろうか。ああ恋人よ、おん身より他に我を知らぬ人はない云々」と応えている。
 即ち、二人にとって「恋」とは、性の如何にこだわらぬ、自由な精神の高みに於てお互の魂が求め合い、惹き合う状態をさしていたといえよう。
 (アザリア関係は校全十四巻七八六〜八六四頁)
 11/30 軍曹として満期除隊。嘉内の除隊を待ち構えていた様にして、書(177)が届く。

大正10年 (1921)

二十五才
 1/23 無断上京 (夜行列車にて)
 1/24 午前八時三十分、上野着。国柱会館を訪れ、高知尾師に会う。
 1/30 書(8)で嘉内には、「あてにして来た国柱会には断はられ、実に散々の体でした」と書き、
 1/30 書(8)で関徳弥には、「そうですね、こんなことが(住みこみを断われたこと)何万遍あったって私の国柱会への感情は微塵もゆるぎはいたしません。」と記す。そして嘉内へ、書(17)(18)(18)(18)と奔流のように立て続けに折伏の手紙を送った。しかし逆に嘉内の心は遠ざかっていった。
 書(9)で「我が一人の友よ」と精一杯の思いをこめて最後の最後まで帰依を求めるが全て空しく悲憤が訣別に至る。
 八月中旬、トシ病気の報を受け急ぎ帰花する。
 12/3 稗貫農学校の教諭となる。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	○ 199	○ 198		☒ 197	○ 194 ☒ 195 ● 196	□ 193 ↑ 母宛	○ 192		▲ 190 ■ 191 ↑ 宮本 (級友) 宛	● 187 ● 188 ▲ 189	○ 180 ● 181 ● 182 ● 183 ○ 184 ☒ 185

二十三才
 賢治は無断上京の表むきの理由を「父母の帰正を成ずる為、家を捨てて出京した」書(8)としていて大方の人がそれを信じている。たった一人同信だったトシの板ばさみの苦痛は筆舌に尽せぬものであったろう。
 二月 微恙
 三月 盛岡の外人宣教師に英語を学ぶ。
 四月 学校より依頼され上京。母校日本女子大に教師の幹旋をたのむ。帰花後疲れとれず。
 六月頃より 病臥。八月も熱が続き、咯血。
 九月十二日付で 母校花巻高女を依願退職する。

二十五才
 上のグラフが示す通り、賢治より書(17)〜書(8)まで十通の書簡が届いている。当時の嘉内の心境を『国民日記』から拾ってみると、
 (前掲書一八〇〜一八三頁)
 1/25 おれのやろうとする仕事として、一、法華経及び日蓮の研究。
 2/16 (真中に)「救世の大聖日蓮上人 礼拝」と書き両側に「南無妙法蓮華経」、最後下方に「合掌」と記した三行の讃辞を記している。
 2/18 自分の心境を記した文中に「賢治の尊い運動」と賢治の行動を肯定したことを認めている。
 2/20頃 書(8)を受けとる。
 同封されていたと思われる「天業民報」(国柱会発行の「日刊新聞」)の購読申込票は記入もされず、そのまま保存されていた。

宮澤賢治の法華信仰を問う

大正11年 (1922)

二十六才
農学校の教諭という仕事は賢治にとっては天職というに相応しい職業であった。新しい友との交友も始まり、明るく充実した日々である筈だったが詩集『春と修羅』に載せられているところのこの年前半期に詠んだ次の詩に、そんな明るさは見られない。

1 / 6 「屈折率」
「春と修羅」第一集より

3 / 20 「恋と病熱」
「くらかけ山の雪」

4 / 8 「春と修羅」

5 / 21 「小岩井農場パート九」
嘉内への書簡を知る者にとつてそれは、ある程度は納得できることであるが、『宮澤賢治 友への手紙』が若し世に出ていなかったら、賢治の謎はどの様に解釈されていくことになったのだろうか。これらの詩は賢治にとつての嘉内の存在と彼の法華信仰の問題点をまざまざと思わせる。

6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1

大正11年、賢治は1通の書簡も出していない。而も空白はこの1年だけでなく、12、13年と3年間も続いている。それは高農時代から「絶対真理を求めてどこまでも共に生きよう」と誓い合った、たった1人の友・保阪嘉内とのあまりにも悲しい別れが最大の原因であった。そこへ重なったトシの死。たとえようもない、その悲しみの深さをこの空白は物語っている。

二十四才
。賢治は、一月から十二年三月頃まで同僚堀籠文之進の下宿を週に一、二度、時には三、四日と連夜訪れ、十時頃から十二時までいて帰った。と伝えられている。兄の夜の外出。家で勤行しないこと。信仰について語らなくなったこと等々をどの様に思っていただろう。

3 / 20
恋と病熱
けふはほくのたましひは疾み
鳥さえ正視できない
あいつは沓やうどいまころから
つめたい青銅の病室で
透明薔薇の火に燃される
ほんたうにけれど妹よ
けふはほくもあんまりひどいから
やなぎの花もとらぬい
〔校全〕二一―一九頁
。この詩ではじめて、「妹・トシ」が登場する。

大正10年 (1921)

2 / 24 賢治から入信を迫られつつも迷っている深刻な心境を綴っている日記の中に、

「小さき信仰(信仰と名づけ称ぶさへ恥しいやうな小さきもの)を持って唯一のモットーとしてふりかざして進む我はかない人生の旅、ああ憐れむべきものよ、おれはまだ迷っているのだ」等々、複雑な心情を記録している。

2 / 25 山梨教育会書記となる。

3 / 22 「賢治、健吉、遠きもの」に「あるかな。」と記す。

4 / 18 「おやじはおやじの人生観がある。おれにはおれの人観がある。だからいいんだ。(中略)それがお互が尊いのだ」と彼も又相容れない、父との相剋に苦しんでいたが、やつこの様に悟り得た。

大正11年 (1922)

7/6 トシの転居に伴い賢治も下根子より学校に通う。重病のトシに対して、賢治の労わりの思いは意外にも非常に薄かった。
 。此のころ身も心も自分のこととて精一杯だった賢治はトシの病の重さや、やる瀬ない深い悲しみを思いやるやさしさを失っていたようである。
 。又、賢治は就職後同僚の白藤教諭に「今は心境が変わって寒修行などは出来ない」と語っているが、トシは賢治の信仰に対する心の変化を感じとっていたに違いない。
 法華経に背を向けた故の修羅。トシの臨終に際し、自分の不実しに慟哭し自責の念に取り乱した賢治。そんな兄が痛々しくてトシは兄から目をそらしたのではないだろうか。
 「ああそんなに／かなしく眼をそらしてはいけない」と、賢治は言う。(無声慟哭)

12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7

賢治の修羅意識 修羅は帝釋天と常に戦っている悪神。宗祖は観心本尊抄 (P705)にて、「願るは地獄、貪るは餓鬼、癡かは畜生、詔曲は修羅云々」と仰せられている。

大きな信(法華信仰)の力からはなれ、まことのことばを失った賢治。秘めごとを持つ故に心にもないことを語り、世間へつらつて修羅の道を歩かねばならなかった自分の心が織りなすのは詔曲模様であるという。

いかりのにかぎまた育さ／四月の気層のひかりの底を／醒しはぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ…(春と修羅)

7/16 下根子桜の別宅へ移る。賢治も、ここから学校へ通う。妹・岩田シゲ看病のため同居。
 藤本さん(看護婦)
 おきよさん(付添婦)
 太田さん(せんたく等)
 母が看病疲れで倒れたため
 の転居だった。
 桜の別宅は林に近く環境は好転した。病床のトシにとつてはよいことであった。
 11/19 豊沢川の実家に戻ることとなる。「あっちへいくと、おらあ死ぬんちゃ。寒くて暗くて厭な家だもな」とつぶやいている。
 11/27 死去(午後八時三〇分)。臨終のことは「うまれてくるたて、こんどはこたにわりやのごとばかりで、くるしまなあよにうまれてくる」
 「あめゆじゅとてちてけんじゃ」
 「Ora Orade Shitori egumo」
 12/23 トシの遺志にて吉田円国桂会へ寄付

大正11年

大正10年 (1921)

5/23 「我将来の方向やや決定的に見ゆ」と考えた。
 出来ることなら賢治の友情に応えたいと願いつつも、賢治の折伏から推してその道は共に歩めないことを見極めた嘉内は遂にそれぞれ的人生観、賢治は賢治の社会に住む、それがお互が尊いのだ。との結論に至ったに違いない。而も、その立場は法華信仰を決定することに微塵も違背するものではなかった。(賢治には受け入れられなかったが)。
 7/1 甲種勤務演習に応召。
 7/18 「七月十八日晴／宮澤賢治／面会来」と頁一ぱい大きく書いた字を斜線で抹消している。
 10/31 除隊(見習士官)
 十日 桂川電気社会会入社
 (山梨県河川湖沼、山岳等の地質、調査を担当)
 7/1 甲種勤務演習に再度応召。
 (翌年三月陸軍少尉に任官)

宮澤賢治の法華信仰を問う